

平成 30 年度 第 2 回小松市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成 30 年 10 月 31 日 (水)
開会 9 時 30 分 閉会 10 時 30 分

2 会 場 小松市役所 3 階 3B 応接室

3 出席者 小松市長 和田 慎司 (議長)
小松市教育委員会
教 育 長 石黒 和彦
委 員 北村 嘉章
委 員 蘆邊 千鶴子
委 員 吉原 慎吾 【欠席】
委 員 中惣 恭子

(事務局関係)

総合政策部長	越田 幸宏
総合政策部 国際&経営政策課長	藤井 勝司
総合政策部 国際&経営政策課担当課長	中野 芳美
総合政策部 国際&経営政策課主査	中村 宜嗣
教育委員会事務局 教育次長	道端 祐一郎
教育委員会事務局 シニアマネージャー	山本 裕
教育委員会事務局 未来の教育課長	中谷 光恵
教育委員会事務局 教育庶務課長	三ツ橋 薫
教育委員会事務局 学校教育課長	吉田 明生
教育委員会事務局 学校教育課指導主事	高田 幸代
教育委員会事務局 学校教育課指導主事	川江 麻美
教育委員会事務局 青少年育成課長	松野 真弓

4 討議事項 ・帰国・外国人児童生徒教育支援について
・地域行事への参加とふるさと愛の育成

5 会議の経過及び発言

○開 会

○和田市長あいさつ

- ・日本遺産に認定された北前船をはじめ、小松にはたくさんの文化がある。これらの文化を大いに活用するとともに、教育の中にも取り入れていただいている。あと半年で新しい元号も始まる。次の元号は日本の文化を、日本人や諸外国の方々にどのように深めて

いくかということにかかっている。

- ・もう 1 点として、グローバル化とサイエンス。サイエンスは地球全体の平和や環境問題、宇宙問題を担っていく若い人たちには必要となってくる知識・技術であると思っている。現在進めている教育の重点化をさらに進めていただければと思う。

○討議事項

- ・帰国・外国人児童生徒教育支援について

<議長>

- ・帰国・外国人児童生徒教育支援について、事務局より説明ください。

<川江指導主事>

【支援が必要な帰国・外国人児童生徒について】

- ・支援が必要なケースとして、日本語での「日常会話が十分にできない」又は「学習に支障が生じている」等生徒本人への支援や、保護者への通訳が必要な場合がある。
- ・これらの件数は平成 26 年度から増加してきている。
- ・現在、支援が必要な帰国・外国人児童生徒の在籍数は 109 名であり、従来から多かった芦城小学校、第一小学校に加え、他の小学校においても増加してきている。
- ・そのうち 6 名の生徒は、日本語が全く話せない状態で入学している。
- ・中学校でも増加しており、在籍しているエリアも広がっている。うち 4 名は日本語が全く話せない状態で入学している。通訳に十分対応することができない状況も発生している。
- ・平成 31 年度は 20 名が新たに就学する予定であり、初めて対応する学校も出てくる。
- ・このように通訳等に対応する必要がある学校数は増加してきており、学校行事が各校で重なる時期は通訳等の需要が多くなる場合がある。

<議長>

- ・支援が必要な帰国・外国人児童生徒の入学について、学校の案内等はしているか。

<川江指導主事>

- ・教育委員会の窓口で、日本語通級教室のある学校は 2 校あることを説明している。対応できる学校へ住居を移される家庭もあるが、各家庭の都合で通学校区が別になっている場合もある。

<議長>

- ・学校としては支援が必要な生徒が 1 名居ても、10 名居ても対応する人員は同じであると思う。日本語のレベルが同じ生徒が同じ場所に集まることで、互いに仲間として切磋琢磨することができると思う。生徒が孤立しないように、調整していく必要があると思う。
- ・家庭の状況に応じた転校や校区を越えた送迎対応など、様々な対応方法があるかと思う。

〈川江指導主事〉

【帰国・外国人児童生徒への支援内容について】

①日本語通級教室での指導・支援

- ・芦城、第一の小学校で行っており、それぞれ専任の教員が指導にあっている。
- ・これらの教室では生徒ひとり一人に応じて指導の方法を考慮している。
- ・他校に在籍する生徒への通級指導も可能であり、数名行っていた時期もあるが、送迎の問題で現在はゼロである。

②日本語支援員の派遣

- ・日本語通級教室が無い学校の生徒に対して、支援員が訪問する形で支援を行っている。
- ・この支援員は、小松市国際交流協会の日本語指導をしている方（5名）が担当している。

③通訳者の派遣

- ・生徒への支援やカウンセリング、保護者と連携を図るため、母国語による通訳支援を行っている。
- ・学校教育課の職員である通訳講師や、外部の通訳サポーターを必要に応じて学校に派遣している。
- ・通訳講師は日本語通級教室を中心に他校も巡回している。
- ・通訳サポーターは、小松市国際交流協会より紹介してもらい、学校教育課で面接をして適した方へ依頼する形となっている。

④その他の支援

- ・入学に際して、ガイダンス冊子を利用して担当者が個別に学校生活について詳しく説明。（冊子は学校教育課で作成）
- ・新就学や中学進学時、高校進学時に学校等で行われる説明会については、調整して通訳を派遣。
- ・教育研究センターホームページ上に、学校生活で必要となる文書をポルトガル語に翻訳したものを掲載。各学校でさらにアレンジして使用している。

【今後について】

- ・今後、重要となってくることとして、以下の3点がある。

「多文化共生」：互いの文化的違いを認め合い、共に生きていこうとする子どもを育てていくことで、子どもたちの成長につながるという認識を、各学校に持ってもらうことが大切であると考えている。

「通訳の充実」：ポルトガル語を母国語とする生徒・保護者が多く、通訳者が不足しているため、充実を考えていくことが必要。

「学習支援体制の見直し」：教育委員会で適応指導教室の設置を検討する必要があると考える。子どもたちにしっかりと学力をつけ、自分が目指す進路を進んでいくためのチカラをつけてもらう支援を検討。

<議長>

- ・支援が必要な生徒の人数が、向本折小学校が突出しているが要因は。

<川江指導主事>

- ・向本折小学校の校区に二家族（親戚）が転入してきており、その子どもが在籍していることで多くなっている。今年になって、他校でも親戚がまとまって転入することで在籍生徒が多くなること起きている。

<議長>

- ・日本語が話せない生徒が入学してきた場合、同じ学校の他の生徒はどのように感じているか。

<川江指導主事>

- ・日本に長く住んでおり、日本語がある程度話すことができる外国人児童生徒が、もともと在籍していたため、多国籍・多文化の状況を自然に受け入れている。支援が必要な生徒に日本語支援員が付きっきりで居られない際には、他の生徒が助けている場合もある。

<議長>

- ・現在、個別に問題が発生していると聞こえてこない。小松は昔から、他の自治体に比べて外国人制度・教育はしっかりしていると感じている。

<石黒教育長>

- ・保護者の就労に関しては複雑なものがある。送迎の面でも、親の勤務シフトなどでできなくなる場合もある。
- ・ファミリーサポートの支援でも、外国人住民の方からは費用が高く、使用していないという声も聞いたことがある。
- ・ポルトガル語を使われる保護者の方は、小松に来て住居を決める方と、本国にいる際に住居を決める方がいるということを知っている。近年、芦城小学校、中学校で支援が必要な生徒が増えている背景には、住みよさを求めて移住している傾向があると考える。
- ・外国人のお子さんを就学させる義務があるかどうかという面では、日本国憲法、教育基本法、国際条約において、「希望されれば受け入れなければならない」と定められている。

<北村委員>

- ・支援が必要な児童のほとんどが小学生であり、中学生は少数であるが、在籍する学年はどのようになっているか。小学6年等が多いのであれば、数年で中学が多い状況となってくる。

<川江指導主事>

- ・小学校では低学年の方が人数は多くなっている。これは低学年から日本語に対しての支援をして学習を進めることで、高学年になるにつれて子どもたち自身にチカラがついて、支援がなくても他の生徒と同様に教室で授業を受けることができるようになっていくためであり、支援の目的もそれを目標としている。中学校ではさらに支援がなくても子どもたちが学習できるようになっているため、人数が大きく減っ

ている。現在、中学で支援が必要な生徒数は、中学に入学する段階で転入してきた方で、日本語が全く話せないという子どもたちが多くなってきている。

〈北村委員〉

- ・支援体制について、子どもたちの保護者で日本語が話せない方への支援はされているか。保護者同士の支援はあるか。

〈川江指導主事〉

- ・時間の調整が難しい部分もあるが、学校教育課でサポーターの方と調整して支援している。保護者の方と密に話ができるように時間を確保している。
- ・支援が必要な生徒の保護者同士のネットワークについては、第一小学校が中心的な役割を担っており、来月には通う学校は関係なく新就学の子を持つ保護者が集まる会を設け親同士のつながりをつくったり、小学校での生活の不安感を取り除くような取り組みとしている。年度末にも学校関係なく、保護者にお知らせを出して交流会のようなものを催したりしている。学校の支援に加えて、保護者が同士つながり、分からない事などを質問されるという取り組みは各校であると聞いている。

〈中惣委員〉

- ・先日、知り合いのお子さんでこれから小学校へ入学するという子どもが、「第一小学校は外国人が多いから嫌だ」と言っていると聞いた。今、保護者同士のネットワークがあるという話であったが、就学前のお子さん同士を対面させるような多文化共生の取り組みを幼稚園の頃からできないか。

〈議長〉

- ・第一保育園はもともと外国人が多い状況がある。それは保護者としてしっかり話をする必要があるのでは。これはレアケースかもしれないが、これから国際人を育てていく観点から必要なことであると思う。

〈蘆邊委員〉

- ・日本語の指導者が何名かいると説明があった。さらなる充実が必要とのことであったが、現在はそれでやりくりできているのか。

〈川江指導主事〉

- ・学校の授業のコマ数と日本語支援員の人数が決まっている中で、最大限に支援員の方に稼動してもらい、なんとか各校を巡回できるようにやりくりしている。現在はやりくりできている状況ではあるが、さらに1~2時間、個別に支援が必要な生徒がいた場合に、支援の時間を充分にとれるかという難しい面がある。

〈蘆邊委員〉

- ・本日、この会場へ来る途中で、外国人就労者の方がたくさん大型バスに乗って、各所で乗り降りしているのを見た。先ほど議長から意見があったように支援がある地区に通うことが一番良いと思うが、親の環境として仕事へ行くにも自家用車が無くバスを利用しているというのが現実であるかと思う。子どもの送迎を考えたとき、市で援助しないとできない状況であるかと思う。市でタッグを組んで良い方向に進むようにしてもらいたい。

〈議長〉

- ・児童クラブには何名くらいいるか。

〈松野青少年育成課長〉

- ・市内全体で20～30名程度いる。芦城に集中している。

〈議長〉

- ・児童クラブでも同様な状況であると思う。児童クラブに預けることで日本語学習が進み、就労している親も助かる面があると思う。このように広い範囲で今日は議論しなければならない。

〈北村委員〉

- ・現在、日本語通級教室は2校であるが、小松の広範囲で支援が必要な生徒がいるのであれば、できれば東西南北に1箇所ずつあると助かるのではないかと。
- ・中学校では、これから外国人生徒が増えるということは多文化共生のすばらしいチャンスであるとする。幼稚園からそのような環境で育っていくことで自然とグローバルな視点で行動できる人となる。学校でも他の生徒と一緒に活動する時間を多くすることが、子どもたち互いの財産になる。

〈議長〉

- ・障害の持っているお子さんも同じ考え方である。市としては拠点をつくっているが、親御さんとしては近所のお子さんと同様の学校へ通いたいという思いがある。それとよく似ている。
- ・また、家族帯同で転入されるかどうかというのは国民性がある。ブラジルやスペインの方は家族帯同で来られる方が多い。中国の方たちは単身で来られる方が多いといった面がある。これによって求められる対応が異なってくる。現状として支援が必要なお子さんはほとんどがポルトガル語かスペイン語である。

〈石黒教育長〉

- ・外国人生徒の在籍数の推移を考えると、一番少なかった時期の1.9倍程度になっている。これから国の方針でさらに増えていくことを考えると、現在の教育方針はとれなくなってくることも考えられる。
- ・多文化共生ということを教えるのであれば、外国人の方々が教育に参加することが大切になってくる。このような能力をどのようにつけていくかということも学校の指導者の面を考えると研修はしていく必要が出てくる。
- ・根本的なことであるが、外国人の方と日本人とで文化の違いがあり、それぞれの国で教育のやり方、考え方が異なっている。親御さんには、これらについてガイドブック等でしっかり理解していただくということが大事である。高校へ進学するという点についても影響してくる。中学から高校への進学はどのようになっているか。

〈川江指導主事〉

- ・中学を境に帰国する、他市町へ就労のために転出する場合もあるが、市内で暮らされている方については、私立・公立・定時制があるが、ほぼ全員が高校へ進学している。

〈議長〉

- ・ものの考え方である。家庭の事情で、中学を卒業して働く方もいる。日本も戦後そうであったが、勉強していただくことで、本人は良い仕事に就くことができる。日

本もそのように国際貢献していかなければならない。高校に行けるようにどうすればよいか、という事を金銭面も含めて、我々はこれから考えていかなければならない。

- ・外国から人材を集めてくる企業・団体がある。このような方たちは3ヶ月なり、6ヶ月なり、日本語を勉強してから来ている。一方で、ブラジルの方たち等は日系2世、3世の方で、個別に友達や親戚などで集まってきている。このように、就労や生活環境はそれぞれ仕方が異なっている。
- ・能美市や加賀市にも多く働いている。小松が外国人の方の教育をがんばっているので、外国の方が家族で小松に住む方が多いという実態なのだと思う。これは小松としては評価すべき点かと思うが、教育長が言うような課題もある。この課題をどうクリアしていくかが「国際都市こまつ」をめざすステップアップになると考える。
- ・景気にもよるが、これからも増えていくだろうと考えると、教育問題だけでなく横断的に生活面も含めて、市でプロジェクトチームをつくり、早急に結論を出していく必要がある。本日は教育に特化して話しをしているが、これから入管法も変わるため、様々な課題に対応していくことが求められる。

<北村委員>

- ・外国人の子どもが増えるということはプラスであると考えます。小松の魅力として捉え、取り組みを進めていくことが大切である。そのような方向性でまちづくりと教育を連動させてやっていくということであると思う。

<議長>

- ・単身の方を含めて、小松市の外国人住民は2,500~2,600人で人数はそこまで多くはないが、我々はもっと深堀していく必要がある。

<石黒教育長>

- ・北村委員の意見に同感である。私もこれまでの小松の教育は、行政との連携で色々な意味で良い効果が出ていると思っている。先ほど、国際交流協会の話があったが一般社会や地域との連携も当然必要であり、そこがうまく行っていると思っている。

<議長>

- ・国際交流協会には本当ががんばっていただいている。ジャパンテントでも留学生のホームステイ受入先は小松が多い。小松市が国際化されてきている事実である。北村委員が言うとおりの前向きに捉えていくとよい。ただ、市内では学校、保育園、医療機関等で問題を抱えている。

<石黒教育長>

- ・小松市ではイスラム系のハラール対応を進めているが、学校においても、給食で豚肉が出る際の献立など、個別に対応していかなければならない。

<議長>

- ・本日は重要な切り口での議論となった。ぜひ教育委員会の優先事項として取り組んでいただきたい。我々も教育以外の面も含めてプロジェクトチームで行政としてレベルアップしていきたい。現在は受入れ等で問題は起きていないが、これからさらががんばっていかなくてはならない。

- ・もう1点として、高等教育を受けるチャンスを提供することを考える必要がある。高等教育機関に進学せず、就労してしまうのは学力面の課題もある。市立高校に専用の20~30人のクラスをつくるなどもひとつの方法である。そのようなことを考えていく時代が来ている。

〈北村委員〉

- ・小松には市立高校や進学校があるので進学の保障してあげることも大切であるし、教育以外でも市が横断的に取り組んでいくことも大切であるため、お願いしたい。

○討議事項

- ・地域行事への参加とふるさと愛の育成

〈高田指導主事〉

【小松市の児童生徒の状況】

- ・今年度の全国学力・学習状況調査質問紙調査の地域に係る質問事項において、全体的な傾向として、小松市は多くの質問で石川県より高い数値となっている。また、中学校よりも小学校の方が継続的に高い数値となっている。
- ・特に、「地域について学習している」や「地域の行事に参加している」という質問については小学校において高い数値となっている。
- ・しかし、「地域で起こっている問題に関心がある」や「地域をよくするために何ができるか考えることがある」については、県よりは高い数値であるが、数値としては低いものとなっている。
- ・行事には参加しているが、子どもたちが主体的・積極的に地域とかかわり、地域について考えるということについては、まだまだ課題がある。

【ふるさと愛を育む取り組み】

- ・ふるさと愛については、教育基本法前文において、「伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する」と示されており、ふるさとを愛する心とは、「地域を愛する心」、「地域とつながり大事に思う心」、「地域の発展につくす心」と捉えている。
- ・これまでの学校の取り組みでは、総合的な学習の時間において、
「地域の素材を活かした学習」地域の良さや課題を考える、地域の方から学ぶ
「地域への関わりを通じた学習」地域清掃活動、地域行事への参加
「伝統文化の継承」お祭りや踊り、太鼓など
これらを学校の中で進めている。
- ・小松市教育委員会では、このような子どもたちの学びをさらに後押しして、小松市全体に学びを広げていくため、継続的に学習教材をつくってきた。
(H26) 小学校社会科資料集「わたしたちの小松」
(H28) ふるさと学習ユニット教材、中学校英語教材「Amazing City Komatsu」
(H29) ふるさと道徳教材「ゆたかな明日へのパスポート」
- ・小松市のどの地域に住む子どもたちにも、学習しながら小松市の自慢を知ってもらい、誇りを感じてもらいながら、大人に成長していつてもらいたいという思いを込

めて教材を作成している。

- ・子どもたちだけでなく、教員への啓発も行っている。ふるさと教材を活用した授業研究会の開催や、今年度から新規採用教職員を対象に地域理解講座として教材を使って実際に地域を歩いてもらう学習もしてもらった。
- ・これらの教職員の意識の向上とともに、今後さらに、地域社会と連携し、子どもたちが活躍できる場を設定していきたい。そうすることで、地域行事で役割をもって主体的に参加し、学習内容を地域へ発信できるようにし、子どもたちのふるさと意識の向上を図っていきたい。そして最終的には子どもたち一人ひとりがそれぞれの個性を大事にしながら、地域社会で活躍する人材となることを目指し、ふるさと教育を進めていきたい。

<北村委員>

- ・歴史伝統だけでなく、地域全体が学びの場所であるということが根本にある。先生方も学校だけでなく地域に出てほしい。
- ・以前の教育では横のつながりを重視していたが、現在は縦割りを重視している。これは学校ではなく地域の祭りなどに出て初めて体験できるものである。子どもたちの将来へ向けた大きな成長となる。
- ・また、地域の良さを学ぶことで、県外の大学へ進学しても、ふるさとへ戻ってくることにつながる。
- ・先生は5年程度で異動する。新任の先生には地域のことを学び、理解してもらうことが大切。また先生方には地域の行事に積極的に参加してもらい、地域のことを学ぶとともに、地域住民とのコミュニケーションを図ってもらいたい。

<蘆邊委員>

- ・地域では子どもが少なくなってきたこともあり、子どもを育てようというチカラは強いと思う。子供会では町の行事に参加したり、自分たちで行事をつくっていくということが強く感じられる。
- ・小中学校の頃は地域とのつながりがあるが、高校になると地域とのパイプがだんだん細くなっていると思う。本来なら生まれてから大人になるまで一貫して地域とつながっていけるとよい。
- ・先生は数年で異動となる。学校と地域の連携面では、テキストによる講座も開かれるなど、小松のことを広く知るには良いと思うが、赴任してきた先生が地域の環境・行事を知ることがまだまだ不十分であると思う。先生は地域に積極的に出てもらい、地域の小さな事柄なども知ってもらい、子どもたちに体験させることで、地域を大事にする子どもに育っていくと思うので、そのような指導をしてもらえるとうれしい。

<中惣委員>

- ・計画訪問でまわっていると、地域の催しなどについて掲示物をつくるなど、子どもたちが常に目にふれるように先生方が工夫されている。ふるさと教材も拝見して素晴らしいと感じたが、親御さんたちがこの教材を見る機会はあるか。

<高田指導主事>

- ・購入してもらっている教材は家庭で見てもらえるが、学校に据え置いている教材もある。それらについては保護者の方の目に触れる機会はなかなかない状況。

<中惣委員>

- ・ぜひ、親子でこのテキストをもとに会話できるような機会があればよいと思う。

<高田指導主事>

- ・学校によっては、自宅で道徳について話合いましょうということを取り入れる学校があるため、そのような際に使ってもらえるように声かけしていきたい。

<石黒教育長>

- ・ふるさと教育をする目的は、地域の文化を外国の人たちに伝えられるようになること。グローバル社会とは単に多様性を認めるということではなく、色んな外国の方々自分たちが住んでいるところの良さを出し合い、それらを調和し発展させていくことがグローバル化であると考えている。
- ・よって、自分たちが住む、ふるさとの大切さを知ることは学校教育や、地域の方々にとっても大事な視点であると思う。日本人としてのアイデンティティーをつくることにも繋がる。
- ・私は、大学は県外で、イギリスにも数ヶ月住んでいた。そのときにつらいことがあるとふるさとの小松を思い出していた。やはり心のベースは家族であり、友達であり、地域である。そういう意味でもふるさととは大切である。
- ・単にふるさとを知るのではなく、ふれて、感じて、理解するという段階を経る必要があると思う。形だけやるのではなく、やった結果、どのようなことを感じたか・学べたかということも重視したい。

<議長>

- ・先のテーマと合わせて、子供歌舞伎や子供勸進帳に外国人の子どもがたくさん応募してくるようになると、外国人子弟教育もふるさと教育もうまくいくのでは。

<石黒教育長>

- ・そういう視点が大事であると思う。

<北村委員>

- ・教育長の言うとおりに、これまで外国人の方々としっかり対話できない面もあったかと思う。外国の方がその国のことを話せる一方で、日本人が自分の国のことを話せないということは大変残念である。これができて初めてグローバル化になっていく。
- ・子どもたちも先生も、机上だけでなく、地域に出て参加することが大切。参加して初めて身につく。ぜひとも積極的にやっていってもらいたい。
- ・小松は特に神輿や子供獅子などの祭りが盛んであるため、そのような参加を積重ねることが子どもたちの財産になる。

<議長>

- ・まさにそう思う。お祭りや町の神社を清掃するなど、それだけでも十分子どもたちのふるさと教育になっていく。

○閉 会